

(書評者)
訪問看護ステーションみのり
小瀬古伸幸

『13の実践レシピで解説！
看護を教える人が
発問と応答のスキルを磨く本』

内藤知佐子、高橋聖子、高橋平徳＝著

2023年発行
2,400円＋税 医学書院



質問ではなく、発問。対応ではなく、応答。

本書のタイトルを見た時、なぜ「発問」と「応答」という表現が使われているのかと疑問を感じましたが、冒頭を読んですぐにその意味が理解できました。

本書では発問の意味を、「学生たちにより深く考えてもらうため、教員から意識的に投げかけ、問いかけるアプローチ」としています。つまり、学びを促進するための問いです。一方、応答は「学習者からの発言や意見、考えを受け止め、それに対して指導者が適切な反応を示すこと」という意味であり、著者らはそれを重要視し、特に読者に伝えたいという思いがこの本には込められています。

つまり、教員あるいは指導者は、発問を投げっぱなしにするのではなく、応答する力や責任をもつ必要があるということです。

●思考が動き始める指導者からの「投げかけ」

「人は問われると考えます。逆に、問われなければ立ち止まることなく、話が流れていきがちです」(p16)。

私自身の経験を振り返ってみても問われなければ、わかったつもりで進んでしまうことがありました。臨床場面で、「なぜ患者さんはそのように行動したのか」「その背景には何があったのか」「患者さんはどのような思いがあり、その言葉を発したのか」などの投げかけを指導者がしてくれたおかげで、思考が動き始めた

のを覚えています。その問いの意図は、もちろん患者さんの理解を深め、看護に反映することもあるでしょうが、本書では「自分自身で考えるという習慣を身につけてもらうために、教員は発問し続けていく必要がある」(p17)と述べられています。この点が非常に重要です。つまり、問われることで「理解したつもり」から抜け出し、考え抜く力を身につけていくということです。

●学びが深まる指導者からの「応答」

先述したように、発問を投げっぱなしにしているはいけません。教員は学生の反応に適切に応答することが必要です。このとき、学生の間違いを指摘するのではなく、学生の思考の過程や努力を受け止めることが重要であり、対話的なアプローチで学生と向き合っていくことが求められます。そして、このような発問と応答のサイクルを繰り返すことで、学生自身の学びが深まっていくわけです。

最後に本書を一言で表現すると、「学習者が深く考える習慣を身につけるための発問と、学習者の反応を受け止め、リフレクションを促進する姿勢や技術を学べる本」と言えます。ここで「学生」という言葉を使用せず、「学習者」という言葉を用いたのは、臨床の現任教育においても役立つ本だと考えたからです。【精】